

# その天使は死んだ

ちゅらん

## 墮ちたとき

---

ああ、神様なんて嘘っぱちだ。

消毒のにおい、使いまわされたシーツ、薄気味悪い天井の染み。

13歳の冬、

病院の固いベッドの上でわたしはそう確信した。

それは突然のことだった。

「明日から入院してください。」

有無を言わずそう小児科の先生から言われている母を横目に

明日から早起しなくてすむ！なんてことを考えていた。

母はきっと動揺していたんだろう。

心配させないように何事もないような顔をしていた。

いや、どこか上手にしていたのを私も少しわかっていたのかもしれない。

携帯を取り出し、私を座らせて、大丈夫。と言うと、

電話をしてくると、少しの間外へと行った。

ここからわたしを造るおおまかな部分のはじまりになっていく。